

大拵の画家

天才・御舟と孤高・華岳

メナード美術館のコレクションは、前にも述べたが近代絵画が主体である。その在り様は、絵画史上重要な作家の作品は一通り網羅し、その中でも特に肝心の作家については何点もある。すべてがその意の通りにはいっていないが、例えば近代日本画の歴史の中で、速水御舟、村上華岳の作品がそれである。

御舟については、若くして天才と謳われ、日本画の革新を志したと評価されながら、全く市場には流通していなかった。昔は鑑賞家の世界では幻の作家と言われていた。それが40年程前から少しずつ目に触れるようになり、メナードコレクションにも加わるようになった。御舟の中期から後期へかけての《鷹》《黍ノ図》《蚕牛花》《芙蓉》など、皆彼の画業の中でも重要な作品である。御舟は残念ながら40才で亡くなるが、美術館の開館一周年記念には、洋画家で、同じく40才を前に

して世を去った岸田劉生と並べて、二人の天才画家の展覧会を開催した。

華岳については、彼は観音菩薩に「久遠の女性」を見出し、悟りを開かんと修行する仏陀の姿に自己を重ね合わせ、高い精神性を追求していった。当館所蔵の《菩提樹下静観之図》と《聖蓮華》の二点は、その画境の代表的な仏画である。又彼が生涯描き続けた牡丹では、晩年の《牡丹之図》がある。彼は晩年は喘息に悩み、画壇から離れて益々求道的な制作を続けて行った。その最後の境地に通ずる《寒山水涵図》がある。何時の日にか、大きく華岳を回顧する展覧会を開催したいものである。

近代日本画の歴史の中で、院展の三羽鳥のあと大きな存在であった奥村土牛がある。牛の歩みを志したと言われるように、遅咲きではあったが、豊かで柔い色彩の作品で世に出て、戦後、鳴門の渦や吉野の桜を描いて大器晩成の開花を見た。当館には、代表作の《文楽》があり、晩年お得意の花では、《紅白牡丹》があり、《椿》がある。

京都画壇の大きな存在では福田平八郎がある。最初は精緻な写生派であったが、序々に単純化、装飾化が進められ、やがて独自の画

風を確立する。文展、日展を舞台に、画壇の最高峰に登りつめた。所蔵には、彼の最も多い題材であった《筍》《竹に雀》があり、《鮎》がある。
御舟、華岳、土牛、平八郎皆ともに精神的に高い境地にあり、厳しい修行の上にも到達した画境にある。現在の作家たちが目指して欲しい所である。

(元メナード美術館顧問)



速水御舟《芙蓉》1934

村上華岳《菩提樹下静観之圖》部分1935



メナード美術館開館25周年記念
コレクション名作展Ⅲ 近代日本画と工芸
4/20~6/30